

火山防災協議会等連絡・連携会議(第2回)

## 桜島現地見学会 ご案内

—平成25年8月26日(月)本会議終了後—



鹿児島市街地からみた桜島

桜島は、現在国内で最も活動が活発な火山のひとつで、北岳・中岳・南岳の3峰と権現山などの側火山からなる成層火山です。有史以降4回の大規模噴火（南岳の山頂噴火及び側噴火）が発生していますが、今年度は1914年（大正3年）の大規模噴火から100年の節目の年にあたります。この桜島は、人口が密集する鹿児島市の市街地に隣接しており、島内には約5000人の住民が火山とともに生活しています。

今回の現地見学会では、火山としての桜島の歴史や自然、火山観測・監視体制などを学ぶとともに、過去の噴火によって形成された地形や遺構をめぐり、桜島の火山防災活動に関する展示や道路降灰除去車両について見学することで、桜島の火山活動や火山監視体制・防災対策を実感していただくことを目的としています。

見学会を通じて、雄大な桜島の自然景観も堪能してください。

### 《桜島現地見学会コース》

13:00すぎ 本会議終了 → 昼食 ※①～⑥は次ページの見学地点に対応  
13:50 バスにて会場を出発  
14:45 鹿児島港フェリー乗り場出発  
15:00 桜島到着  
15:10 桜島ビジターセンター(①)、溶岩なぎさ遊歩道(②)、ロードスイーパー(①)を見学  
16:00 桜島ビジターセンターを出発

～以下、2手に分かれて見学～

#### コースA (約40名)

16:10 桜島火山観測所(③)を見学  
17:00 桜島火山観測所を出発  
新島(④)など島の北側を車内見学しながら、黒神埋没鳥居へ  
17:30 黒神埋没鳥居(⑤)を見学  
17:50 黒神埋没鳥居を出発  
有村集落(⑥)など島の南側を車内見学しながら、桜島港へ  
18:30 桜島港を出発  
18:45 鹿児島港フェリー乗り場到着

#### コースB (約40名)

新島(④)など島の北側を車内見学しながら、黒神埋没鳥居へ  
16:30 黒神埋没鳥居(⑤)を見学  
16:50 黒神埋没鳥居を出発  
有村集落(⑥)など島の南側を車内見学しながら、桜島火山観測所へ  
17:20 桜島火山観測所(③)を見学  
18:10 桜島火山観測所を出発  
18:30 桜島港を出発  
18:45 鹿児島港フェリー乗り場到着

## 《見学施設等の紹介》

### ① 桜島ビジターセンター

桜島ビジターセンターは、桜島フェリー乗り場すぐそばにある「火山のミニ博物館」です。

桜島をより深く理解してもらうために、歴史や自然について分かりやすく展示、解説し、様々な情報を紹介しています。館内には、桜島の歴史、植物の遷移、地域の観光情報や防災活動など9つのコーナーからなり、ハイビジョンシアターやジオラマ・パソコンなどによって生きた桜島を体感することができます。なお、今回は、ビジターセンター駐車場にて、実際に桜島での降灰除去に活躍しているロードスイーパーを見学する予定です。



### ② 溶岩なぎさ遊歩道

桜島フェリー乗り場から南側一帯の海岸には、1914年（大正3年）の大正噴火で流出した溶岩流（大正溶岩）が広がっています。この溶岩上に全長約3kmにわたり整備されたのが、溶岩なぎさ遊歩道です。大正噴火から約100年が経過して、溶岩の中にたくましく根を張る植物、ゴツゴツした溶岩が広がる磯辺、錦江湾の対岸には鹿児島市街地、桜島の雄大な山容を楽しむことができます。



### ③ 桜島火山観測所

1955年（昭和30年）に桜島南岳の噴火活動が活発化したことをきっかけとして、1960年に設立されました。この施設は京都大学防災研究所火山活動研究センターの本館であり、1914年（大正3年）の噴火で流出した溶岩の上に建設されています。

南九州には、桜島をはじめ、霧島山、薩摩硫黄島、口永良部島、諏訪之瀬島など活動的な火山が並んでいますが、観測所はこれらの火山に設置された観測点からのデータを集約して研究を行う拠点となる施設です。



### ④ 新島

1779年（安永8年）の安永噴火の際に、桜島北東海域では海底噴火または隆起によって新島（燃島とも呼ばれる）を含む8個の島が出現しました。後に海中に沈没するなどして、現在に至っています。



### ⑤ 黒神埋没鳥居

1914年（大正3年）の噴火では、黒神一帯は火山灰、軽石等で埋めつくされました。その際、もともと高さ約3mであった「原五社神社」の鳥居は、噴火開始後1日で、上部だけを残して埋まってしまいました。この鳥居は、昭和33年に鹿児島県の文化財（天然記念物）に指定されました。



### ⑥ 有村集落

桜島の有村地区は、昭和火口に最も近い集落です。1975～85年（昭和50～60年）にかけて爆発的噴火が多発し、溶岩が有村集落に被害を及ぼしたため、集団移住を余儀なくされました（ほとんどの人は、鹿児島市市街地の南部丘陵地に位置する星ヶ峰地区へ引っ越しました）。



## 《桜島 過去の噴火》

### 1914 年大正大噴火

1914 年（大正 3 年）1 月 12 日に始まった噴火で、南岳の西及び東山腹から溶岩が大量に流れ出し、5 つの集落が溶岩流に埋没しました。また、3 つの集落が火砕流で消失し、噴火前約 2 万 1 千人のうち約半数の島民が移住を余儀なくされました。犠牲者は噴火と地震に起因するものを合わせて 58 名と記録されています。この噴火で流出した大量の溶岩は、当時の瀬戸海峡を埋めて大隅半島と桜島を陸続きにしました。

### 1946 年昭和噴火

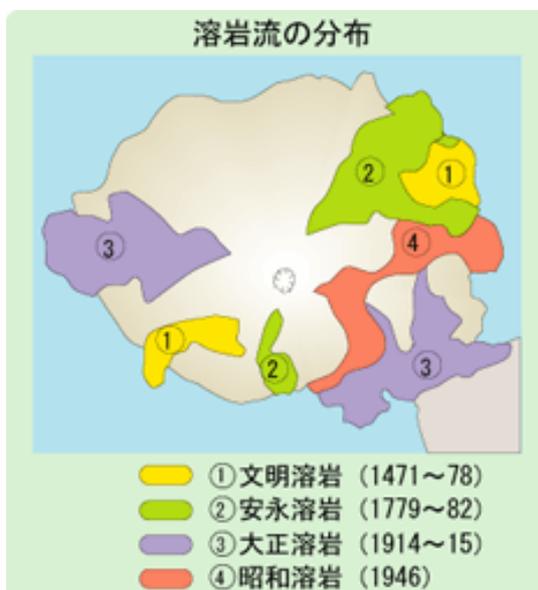
1946 年（昭和 21 年）1 月に始まった噴火では、3 月 9 日に南岳東斜面（昭和火口）から噴火が始まり、溶岩が流出しました。溶岩流は、北東と南に分流し、北東側は黒神地区の集落を埋めつつ海岸に達し、南側は有村地区を通過し海岸に達しました。

### 1955 年以降の南岳山頂噴火による大量火山灰の放出

1955 年（昭和 30 年）以降は、南岳山頂火口から噴火を繰り返し、噴石や火山灰を噴出させるようになりました。1970～80 年代には活動はさらに活発となり、「ドカ灰」と呼ばれる大量の火山灰が降り続くこともあり、人々の生活に大きな影響を与えました。

### 2006 年以降の昭和火口の活動

2006 年（平成 18 年）6 月 7 日に、南岳東斜面（昭和火口）で新たな噴火が発生しました。以降、南岳山頂火口からも時々噴火は発生していますが、昭和火口が中心となって爆発の回数が再び増加してきました。2011 年（平成 23 年）には、年間爆発回数が 996 回に達しました。



国土交通省 九州地方整備局  
大隅河川国道事務所ホームページより